

會



報

1960年4月

208

日本山岳会

ネパールの シェルパ問題 大塚博美

御無沙汰いたしております。こちらで正月を迎えすつかりいい気持ちになつてしまいました。またシェルパ達の正月にもぶつかり、あつちこつちにまねかれて夜な夜なシェルパのダンスに時を過しました。さすがにこの辺はシェルパの故郷で、われわれのシェルパ達の家や友人は殆んどこのナムチュ・バスールを中心としたクムジュン・ブルテ、クンデ、タメといふところとです。アンツェリン、チョタレ、サルキ、アンナンギヤール

とマナスルで顔なじみの連中とも会いました。二月五日ベース・ハウスをたまたみ帰路のキャラバンについております。

海外向けのニュースで今年は日本隊がこのヒマラヤへ女性隊をはじめとして四、五隊入ることを知りビックリしております。何というブームでしょうか。それにしてもネパールにとつてこんなよいお得意さんである日本隊だけを何故に意地悪してシェルパ問題をモメるのだからよつと理解に苦しんでおります。

今度の隊もそのとばかりを食

つた格好でしたが、最初から作戦をよく練つて行つたので逆手を食ることが出来た。全くJACの諸賢の御教示と御協力がなかったらあまたうまきはゆかなかつたと思ひます。しかしカトマンズで過した交渉の六日間には全く腹の立つことばかりでしたが、すべての遠征隊がもつとスムーズに自分の手で責任をもつてシェルパを選べるような組織でなければならぬと思ひます。ネパール自身についても登山観光立国を考へてみればサービスに努めるべきですが、そのくらいのがわかれれば話もつと簡単なはずで。

私は今回三カ月ソロクン・ブー・ヒマラン・ソサイテイといふものについて語り、聞きまちがえや勘違いのないように丹念に聞いて後に続く登山隊の参考にしてもらおうと思ひます。

第一にヒマラン・ソサイテイの性格。これはすでに承知と思ひますので略しますが、要するに政府要路の数人の人間と、このソサイテイのボスとの私腹をこやすために作られたものと思ひます。

第二にシェルパのリストについて。このソサイテイはソロクン・ブのシェルパを登録していますがこれはナムチュに支部があります（この支部長はウオルキン、カトマンズはアンパブ・ソンの人間が長で、政府の監督はソンの息子がなつています）。このナムチュのウオルキン一味の連中にシェルパ達の知らない間に勝手にリストを作りまし。われわれのブードルジェ、ニムドルジェなどはソサイテイから雇つた二名ですが、この連中と最初にロイヤル・ホテルの庭で初対面の時はヒマラン・ソサイテイに入つていないといつておりました。後になつてよく事情を聞いてみまるとこんな次第なのでした。ですから勿論間違ったのでなければならぬのは、同性異人の多いことではある日本隊などが大変な手違いを生じたことがルツェンはいつていました。しつかりした登録ナンバーと名前と登山歴、これが絶対に必要です。

このリストは一部貰いましたから帰国後に見せたいと思ひます。

第三にアンパブの悪評。噂や評判で人を云々するのは早計だし誤り伝えられてゐることが多いので危険ですが、カトマンズで聞いた彼の評判を現地のナムチュ・バザールに行つてたしかめてみました。

ナムチュ・バザールは、ズドコシとボーデコシの分岐する北側の尾根に標高三五〇〇米のところにあるソロクン・ブの重要なバザールです。二つの大きな河の凄く浸しよく作用で谷は深くえぐられバザールとして重要なこのナムチュもこの登り降りのはげしい道には手を焼き、何とかモンズンになつても流れない丈夫な橋を作りたいて政府に願つたが、この時アンパブが一手に引受け三千ルピーを殆ど懐にしてしまつたというのがその噂です。ナムチュ、クンデ、ブルテ、クムジュン、タメミなどこの橋を利用するすべての村の各家から一人づつ十日間出て働くようにいわれたが、結局一ルピーも貰えなかつたといつていました。そしてその橋は一カ月後の大水であつたという間に流されたのであります。私達はそのためひどい高捲きをさせられ二重に腹が立つたわけでした。

私はシェルパ達には何の不満も持ちません。彼等は常に安らぬ忠実な素朴な心を持つて懸命に仕事をしている連中です。ゲージリンの連中も故郷はすべてソロクン・ブです。ナムチュやクムジュンに住む連中は理由があつて故郷にとどまつてゐるに過ぎないのです。ゲージリンがよくて、ソサイテイが悪いといふことはいえません。ただ数と質においてはゲージリンが多いといふことです。ソサイテイがゲージリンを雇つてはならぬといふことは全くのナンセンスで自らの首をしめるようなことです。

そしてまた日本隊だけがこのソサイテイに意地悪されてゐるような気がします。事実他のエクスペディションはカトマンズでシェルパを雇つてもめたことは最近聞いております。勿論英国、米国、印度、ソ連など大公使館がカトマンズにあるので日本とは比較にならない程に強力に圧力をかけることも一助となつてゐるのではありません。

第四に今年の春の印度のエベレスト隊は何と五十名のシェルパを雇うそうです。が全然ソサイテイを通じません。ゲージリンとソロクン・ブと半々、ボーティはソロクン・ブから三百名、ゲージリンから二百名、隊員は二十八名といふこれも驚くべき数のパーティーです。

が、シェルパ雇傭に関してはテンジンも一肌ぬぎ、一言も文句をいわずにわかつたらしいのです。ガルツェンにいわせると「シェルパに二つはない。皆同じである。ダーリンとカトマンズに組合が二つあるからいけないのだ。これを一つにすべきだ」といつて一昨年テンジンをはじめコイララ首相も一枚加わつて仮称の「ネパール・シェルパ・クライマーズ・アソシエーション・カトマンズ」なる組織を作りかけたものですが、テンジンの働きが少しにぶいのでせっかくのチャンス逃してしまつたといつていました。今回もイエティ・パーティーに隊員とすることの出来たのは成功でした。彼はダーリンに住みながらダーリンの肩を持つてでなく、シェルパ全体のことを常に考えております。われわれが受けたソサイティからのトラブルに非常に恐縮し、一日も早くよい組織とよいシェルパのリストを作るといつておりました。そして必ずリーダーがリーダーをはじめシェルパを選べるようにするといつてカトマンズでテンジンと会議をするための連絡の手紙を出しておりました。それに対するテンジンの返事は「心配することはない。今年の印度隊は在カトマンズ印度大使館から申入れをしてすべて隊の責任で選んだから、若し話し合ひでうまく行かないときは印度大使館へ相談するように」といつた意味の返事がありました。私達の隊がはじめてナムチェ・バザールに入つたときもローカル・ポーターを雇う問題でソサイティのナムチェ支部はわれわれにト

ラブルを持ちかけました。それはすべてカトマンズのアンパブからの手紙によるものでしたが、この問題も隊の態度とガルツェンの手腕によつて無事にうまくおさまりました。滞在中は何かと色目で見られましたが、印度隊がついにソサイティをボイコットしてすべてフリーにシェルパ、ポーターを集め出したので帰る際にはガルツェンにしきりにあやまり、何とか仕事をくれるように頼んでおりました。

話は別ですが、ガルツェンは二十五年ぶりで故郷に錦をきて帰つたわけですが、彼の人気と信用は大したもので、ソサイティの帰りなどは絶対にまつすぐにベース・ハウスに帰れませんでした。酒の飲めない私がお目付役でいつも一緒に親戚、友人の家に引つづいてまはれてはジャンをすめられていました。彼の外交手腕と宣伝は実にたくみでこのカトマンズのすべてのアリアに機会あるごとにシェルパは一つの組合でなければいけない。今のソサイティはよくない」と説いて歩いていました。

われわれがカトマンズに到着した昨年の十一月とくらべると事情は大分変わつてきております。福岡隊を手はじめとして、飯田、慶応隊とトラブルの連続でしたが、今や私の推察では印度のエベレスト隊を契機にソサイティは解散する日も近いと思われます。

今年の春から続々と入国する日本隊のほか、英国のアンナブル、スイスのダウラギリ、米国のナンダ・デヴィ、印度のエベレストと各国がけんを競うの感があり

ますが、日本一國で四、五隊も来るといふのは数の上で断然群を抜いています。

私はつらつら思うのですが日本から来る隊がテンデンバラバのシェルパ対策では現地についてはとてもかなわないと思います。勿論その一つの隊については隊長の責任でしょうが、もつと大局からみて日本隊全体のことを考え自分の隊だけよければよいというその場かぎりの態度とみられる交渉をしないようにJACあたりで方針をきめ外務省と共に強力にネパール政府に交渉する必要があると思ふのです。その隊の雇うシェルパに対しては隊長の責任において指名する。若しこれを許可しなければ日本から一切登山隊はヒマラヤへ行かない。といったくらしいことをいつてもよいのではないでしょうか。何となく弱腰交渉であるといふのは少しおかしいと思ひますが……

まだいろいろ細かい話もありますが今回はシェルパ雇傭についてだけなので略します。

どうか世界にききがけようソサイティの存在を裏付けするような行為を日本の登山隊がしないように、この手紙が一助となれば望外の幸せといふものです。若しカトマンズについて、はつきり事情の変化がありましたらまたお知らせします。(二月七日)

エヴェレスト領有問題 中共・ネパール間の国境協定に調印して帰国したコイララ・ネパール首相は四月四日「中共側はエヴェレスト全地域が中共領土だと主張したが、これを拒絶した」と語つた。

ヒマルチュリ登山に 関する経過報告

日 高 信 六 郎

昨年のヒマルチュリ登山隊は悪天候に妨げられて日を過ぎ、五月二十一日最後のチャンスをつかんだ松田、石坂両隊員によるアタックも成功せず、七月六日全員帰朝した。

今後の方針については、八月十八日緊急理事会と海外登山審議委員会合同会議を開いて、村木隊長から、隊員間で検討した結果を聞き、登頂の可能性、時期、ルートを選定その他につき、出席各員の間で研究の上登山隊としての結論を出すこととなり、十月一日の理事評議員合同会議で検討の末、一九六一年春に再挙する目標の下に実行案を練ることに決まり、その準備のための組織を作ることとを委嘱された三田、成瀬、小原、村木の四氏において検討をつづけた。

かくて先ず一九六〇年春に南面及び西面に偵察隊を送つて、新登路を徹底的に調査する考えを固めた。他方本会後援の下にヒマラヤ遠征に取りかかった慶応隊は、当初予定のアンナブルナ二峯からダウラギリ二峯に変更を余儀なくされ、昨秋加藤隊長以下の偵察隊を送つたところ登頂の見込みがなく帰途ヒマルチュリ西面のムシ・コイラを踏査してこの方面から登頂の可能性ありとして、目標をこの山に移したい希望をもつて本会の承認を求めて来た(アメリカ隊からヒマルチュリ登山の申請がなされていふ由だったので、加藤氏は取り敢えずネパール政府に対し日本側に許可方申込んで来た)。

よつて本会では十二月十九日緊急理事会を開き、村木隊長松田隊員の立場に同情し、一九六一年春は慶応隊に譲つてこれを後援することとし、本会としては慶応隊の経過を見守りながら従来通り明年春遠征実行の準備を推進することに決した。

二月四日海外登山審議委員会にはかつた上、同十一月の理事会において新たに「海外登山に関する調査、研究、企画および実施をなす」ことを任務とするヒマラヤ委員会を置くこととし、三田幸夫(委員長)、成瀬岩雄、小原勝郎、金坂一郎、村木次郎の四氏が委員に決まり、ヒマルチュリ登山に関する事務はここで主管することとなり、実行委員として石坂昭二郎、松田雄一、竹田寛次、山野井武夫の四氏が差し当りヒマルチュリ登山の残務整理に当ることになった。

したがつて従来のヒマラヤ登山準備委員会はその任務を終了し、同日を以て解散した。ここに本委員会発足以来登山隊及び委員会に寄せられた各位の温かい御援助に對して厚くお礼を申し上げる次第である。

山岳五十四年発行 主な内容は「ゴリザ登頂(加藤)」、ヒマルチュリ偵察(金坂)、西北ネパール紀行(川喜田)ほか。三十四年度会費未納者にはお送りしません。

バルトロ氷河 上の日伊交歓

イタリア隊のガッシュアルムIV
峯登攀記(本号新刊紹介参照)は
本会会員マライニ隊員の筆になる
のだが、その最後の章「氷河上の
花と谷間の杏」には三〇一頁から
三〇五頁にわたって、登頂成功直
後日本隊を訪問したときのこと、
(一九五八年八月十二日)を面白
く書いている。次にその全文を訳
して見た。

なお本文にはベース・キャンプ
から見たチヨゴリザの全景に、日
本隊の登路とアブルツジ公の到達
地点やH・ブルの墜落地点を示
す半頁大のスケッチと、チヨゴリ
ザ頂上から撮影したガッシュアル
ム山群のスケッチ(何れも日本
隊の写真による)を添えてある。

バルトロ氷河で緑茶と海苔

今や雪と堆石の間にちらばつて
ごみ捨て場と糞小屋になつてし
まつたわれらのベース・キャンプ
を後に、われわれはアブルツジ公
氷河を斜に横切つて、日本隊のキ
ャンプに向つた。最初はみんな一
緒に訪問すべきだと思われたが、
天気が悪いので、よりみちを避け
てキャラバンと一緒に直行するこ
とを望んだものがいたから、出か
けたのはウォルター・ボナッチ、
ドクター・ゼニ、ベッペ・オベル
トと私の四人になつた。

日本隊はわれわれを見つづけるが
否や(相当遠方だった)大きな
挨拶をはじめた。ついに日本隊の

ベース・キャンプのテントがある
堆石の小丘に達すると、十人ばかり
がみんな一緒に、桑原教授を囲
んで、われわれを歓迎してくれ
た。いつも変らぬ日本式規律の適
例だ、かれらのキャンプは何もか
もよく整つた風に見えた。旗竿は
勿論気象観測用テントや便所まで
ある。精神、肉体、才智ともに何
一つ欠けたものはない。かれらは
すぐにわれわれを旧友のように取
扱い、私と日本語で話した。こん
な氷河のまん中で、ハジメマシテ
とおたがいに挨拶するのが、まっ
たく自然に見えた。

雪は風を伴つてますます降りし
きる。われわれはしばらく共同テ
ントのなかに引き込んで、おたが
いに情報を交換した。一番主なこ
とは、遠征隊が両方とも目標に到
達したことであつた。

「われわれは八月四日」と桑
原教授が叫んだ。どう見ても五十
四歳とは思えないたくましく親し
み深い人だ、これが平井と藤平、
この二人がチヨゴリザの頂上に登
つたのです……

「われわれは八月六日……と私
が答える」これがマウリと一緒に
G IVの頂上をものにしたボナッチ
です……

みんな大変な眠かさだ、すてき
に温かい歓迎ぶりだ。一人のこら
ずボナッチと握手しようとし、多
くのものがサインを求めた。それ
からわれわれは、緑茶と海苔をご
馳走になりながら、われわれの登
頂の主な経過をながながと話した
そのとき桑原教授は若い隊員に
包みを持つて来させた。その中に
は、オーストリアの大アルピニス

ト、ヘルマン・ブルが、仲間の
クルト・ディエンベルガーと最後
の夜を過ごしたテントのなかで見
付かつた、ブルの遺品が入つて
いた。それは二、三の見すばらし
い品だったが、欧州でも日本でも
われわれすべてのアルピニストに
とつては、感慨無量の遺物たる価
値をもつのである。桑原博士はこ
れをわれわれに渡して、オースト
リアに住むヘルマンの未亡人に届
けるように依頼した。

チヨゴリザにおける 日本人たち

チヨゴリザ(七六五四米)はバ
ルトロで最も美しい山の一つであ
つて、アブルツジ公とかれのガイ
ドたちの登攀(一九〇九年)は僅
かのところで不成功に終つたが、
そのためにイタリア人には親しみ
深い山である。

一九五七年H・ブルとK・デ
イエンベルガーは、ブロード・ピ
ークの目ざましい勝利の後、「移
動キャンプ」という途法もない素
朴な戦法で、この山を試みよう
と決心した。かれらは毎日小さなテ
ントをたたき、すべての食料装
束と一箱に背負つて、ポーターも
なく、つづくキャンプもなしで、た
だあちこちのセラックのかげに食
料を置くだけにした。今度もまた
勝利は紙一重のところであるアル
ピニストの手から逃れ去つた。嵐が
かれらをして、四十八年前イタリ
ア隊が到達した地点と同じ位のと
ころから、引き返すの止むなきに
至らした。

不幸なことには、二人はすつ
かり好調だったので、自信過剰で
この山に取り組み、ザイルを解いて

今にも崩れそうな巨大な雪庇を被
つた山稜を降りて行つた。ドーム
と頂上の間のコルのすぐ近くで悲
劇が起つた。H・ブルは不安定
な雪塊の上に踏み込んで、北壁の
奈落の下に消え失せた。かれの遺
骸は今日も「花嫁」の凍つたヴェ
ールにかくされて、そこに横わつ
ている。

これに反して、日本隊はゆつ
りだが確実に歩を進める正攻法を
とつて、この巨峯に立ち向つた。
京大士山岳会の遠征隊は次のメ
ンバーから成つていた。T・桑原
(隊長) T・加藤(副隊長、一九
五三年マナスル遠征隊員) M・藤
平(アンナプルナー一九五三) M・
山口、M・脇坂(アンナプルナー
九五三) M・中島(医師) K・平
井、Y・高村、G・岩坪(スワ
ヒマラヤ一九五七) T・芳賀、Y
・今川(ウルドゥ語通訳) M・潮
田(映画技師)。当然かれらと共に
パキスタンの役人ワジ大尉がい
た。

日本隊は七月二十一日一五二人
のポーターをつれてスカルドを出
発し、八月八日バルトロ上流にキ
ャンプは設けた。かれらは晴天に
恵まれて、短時間の間に第一(五
六〇〇米) 第二(五九〇〇) 第三
(六四〇〇) とキャンプを進め、
ブル等のキャンプのすぐ傍に第
四(六七〇〇)を置き、第五(七
〇〇〇)をドームの頂上近くに張
つた。七月三十一日そこから藤平
と平井が第一回のアタックに出か
けた。ドームと頂上との間のコル
まで降るのに多くの時間を費し、
午後四時半になつても、二人はま
だ七二〇〇米のところにといたので

同じみちを降ることに決心した。
ここでかれらは稜線つたいより
もつと容易なみちを見つけた。
それはドームの南側に沿つて、ド
ームとカベリ(約七〇〇〇)の間
にはさまれた谷を伝うのである。
この好運な発見が攻撃のプランを
変えるのに役立った。サポーター
の助けをかりて、第四と第五のキ
ャンプは山頂から谷の奥に移され
た。そこから藤平と平井は八月四
日好調に恵まれて最後の攻撃に向
つた。酸素吸入器(毎分二リット
ル)をつけて四時半にキャンプを
立ち、四十分でコルに達し、従前
の登路を辿つて稜線を伝ひ、深い
雪の中を、しばしば雪庇の崩壊に
脅されながら登つて行つた。

十三時には酸素が足りなくなつ
たが、二人は少しもひるまず、大
変な努力で、だんだん軽く不安定
になる雪を冒し、ゆつくり登つて
午後四時には、最後の峯頭に達し
た。チヨゴリザの頂上は高さ五〇
米ばかりの岩のテラスからなり、
これに取りつくには大へん手ごわ
い障壁であつた。とうとう頂上に
ついたのは、十六時三十分であつ
た。そこは二人が一緒に立つこと
が出来ない位に尖つて不安定であ
つた、その晩十時三十分一十八
時間の苦闘の後、藤平と平井は第
四キャンプのテントは戻つた。
その間にもサポーター隊は無為
に日を過ぎなかつた。かれらは
コンダス(六七五三米)とカベリ
(七〇〇〇米)の二雄峯の登攀を遂
げた。だからこの遠征隊は主要目
的を完全に達成したのである。

(日高記)

茨木猪之吉氏追悼会

戦争中穂高で行方不明になつた茨木さんの追悼会を一度やろうとは、かねてからの願ひであつたが交野評議員らの肝入りで昨年十一月五日(木)夜、国際文化会館でひらかれた。会場には佐藤朝山作の故人のブロンズを始め、絵水彩画、スケッチブック、画帖、手紙などが数多く持ちよられ展示された。松方三郎氏の司会により、先ず故人の遺児岳人、立夫、富士子駒子四君の紹介があり、遺児諸君の将来を祝して乾杯した。ついで司会者の指名により数氏がたつて思ひ出を語つたが、ごくいかつまんでその内容を記しておく。

足立源一郎氏——茨木さんとは非常に古いつき合ひで、多分明治四十年の第二回文展のときに、彼が十八歳で東京へ出てきた頃からだと思ふ。それまでは京都で浅井忠に師事していた。第二回文展に彼は愛鷹をかけた絵を出したが、非常によいと思つたそれから小諸へ行つて、あの辺をブラブラ歩いて東京へ出てきて山の絵をよく書くようになったのは、よく知り合うようになったのは、むしろそれ以後で、第二回文展以後山岳画家となる間は余り私は知らない。

鶴田吾郎氏——明治四十四年頃小石川に部屋を借りたから遊びに來いというので、行つてみると驚いたことに机も何もないし、茨木は金がないから水ばかり呑んでいるという始末。ところが

今日は金が入つたからと、二人で江戸川の彼岸の牛メシ屋へ行ってヤス酒を飲み、飲む程に今度俺は信州へ行くことになつたから、これがお別れだとなつた。茨木は小諸へ行く小学校の大使部屋に転りこみ、丸山晩霞に會つて小学校の先生になつてくれとたのまれて小諸に留ることとなつたが、それがそもそも山へ入る足場になつたのである。小諸には当時若山牧水もいて、牧水との交りが始つた。その当時の茨木の絵が一番よいと私は思う。(牧水が歌をかき茨木さんが絵をかいた色紙を売つたそうだが、なかなか買手がなかつたという。いま、それがあれば大変な値だろう——松方氏)

石井鶴三氏——永いつき合ひだったが余り行き来はしなかつた。先輩と思つていたが同年だというので驚いたことがある。日本美術院の研究所で知り合つたのが最初で、当時茨木はデッサン教室のガキ大将だつた。その頃平蔵をつれて夏、鯛岳へ登り、鯛岳を画いた絵をもちかえつて「今度はよく出来たから見えてくれ」というので、見ると思ひの外よくなかつたが、本人の意気込みが余り凄ひので何ともいへなかつた。院展へ出品したところ案のじよう落選してしまつたので茨木は大いに怒り、小杉未醒、森田恒友、倉田白羊氏らが止めるのもきかず、日本美術院をやめてしまつたし、それから暫くは展覧会へ出品しなかつた。今夜ここに飾られてゐる佐藤朝山作の茨木の胸像を見て実に感

慨深い。これは朝山の彫刻のなかでも非常によい作品で、「あれは茨木以上によく似てるよ」といつた小杉放庵の言葉を、久し振りにこれに接して思ひ出した。(このブロンズは昭和十五年に朝山から茨木氏が貰うけたので焼け残つた由)

茨木と會うとよく山の話をした。大町の杉野玉作や伝刀林蔵の話などもよく出た。中村清太郎、足立源一郎、茨木、私の四人で、こんな旅をしたこともある。行先が全くきまらないので切符は塩尻まで買つた。塩尻で下りて木曾へ入り数原へ行つて境峠を越え、寄合渡へ行つて泊つた。私は飲めないが三人は酒がすきで上気嫌になつたが、「この酒にはアルコールがないのじゃないか」というと「石井君に酒が判るわけがない」といふ。しかししたしかに試験紙がそまらなかつた。それから野麦峠へ行き、そこを農家へ泊つたときも、酒にはアルコールがない。それでも皆いい気嫌だつた。

堀進二氏(日展審査員)——茨木氏を知つてから五十年以上はたつた。私が十六で太平洋画会の研究所へ入つたとき、そこで一緒になつた。戦後偶々丹沢山へ行つたとき、そこで茨木氏の行方不明を知つて驚き、まことに感慨に堪えず、つぎの句をものした。

倒れ木の落葉にうもれて幾年ぞ
山の冷えふと知る明けやホトト
ギス

高野鷹蔵氏——茨木君の父と小鳥鳥水とが知り合ひだつた關係か

ら、明治四十二年にわれわれが赤石へ行くとき小鳥君が茨木君をつれてきた。落合つたのは大月駅で、一年よりなのか若いのかわからないのでビックリした。山は初めてだつたらしく、途中ですつかりへばつたので人夫をつれてかえした。

当時、横浜にあつた私の家にはよく滞在した。文展に出した「北国街道」というのはいい絵だつたが、大正十二年の震災で焼けた。今日持参したのは大正三年の小諸の絵だ。小諸へは丸山晩霞氏の招きで行つたようだが「僕はこんで結婚した」というから「奥さんはどんな人だ」ときくと「美人だから見に來い」といつた調子で、いろいろ面白い話の多い人だつた。

岡榮徳之助氏——私は商売がら茨木さんが小諸にいた時分よくお菓子をお送りした。茨木さんが店へおいでのときは、その風体にも恐れをなした小僧が「旦那さん、お会いになつてもいいですか」といつたこともあつた。

冠松次郎氏——高野さんのお話に出た「北国街道」の絵は、私も覚えてゐる。よく家へ遊びに來られたし、またよく水彩画をいただいた。若山牧水のような人で、まったく放浪の画人だつた。

田部重治氏——茨木と親しくなつたのはむしろ晩年だ。家へ初めて來た時はたしか中村清太郎君がつれて來たのだと思う。三人で酒を呑んだが、後から茨木は「主人はお客、お客は主人」という絵ハガキを間て送つてくれた。茨木は人間の特長をつかむのがうまく、批評がズバリとあつた。晩年二人共女房をなくしてますます仲よくなつた。惜しいと思うことは牧水の伝記が実現できなかったことで、これは佐藤緑葉が本文を書き茨木が装幀することになつたものだ。旅先きでは紀州ですれ違つたこともあつた。茨木の文章は飾り気のない独特のいい文章だつたし、絵は山そのもののより、山麓をかけたものもいいのがあつた。焼けてしまつたけれども、鳥居峠の破れ茶屋をかけた絵は素晴らしいと今でも思つてゐる。

東良三氏——日本へ歸つてきたとき浅草の鰻屋で小鳥さんから茨木さんを紹介された。私が北極圏内を歩いたということで、私の家へ來られたときは、たしか中村さんと一緒だつた。北米アラスカなどの私の話に感心して下さつたので、お酒ばかり呑んで馳走の方は飲んで食べて下さらなかつたのを思ひ出す。

大沢伊三郎氏——茨木さんとは深

い馴染みである。甲府へ来られるときまつて野々垣邦富君の所か私の家へ泊った。私の家は酒屋だから私がいてもいなくても来られればチビリチビリとやっていたし、好きだけ泊つてまた懐然と去られてしまうことが多かった。滞在の間に多くの作品を残されたが、今夜持参した小島、木暮両氏の序文のある画帖や甲州街道を歩いたときのスケッチの画帖は、甲斐の旅での所産である。

横 有恒氏——今夜の会のような集りに参じて、私は日本山岳会がつくづくいい会だと思ふ。それは全く先輩の賜ものだと思ふ。そうした先輩の中でも茨木さんの残されたものはまことに大きい。茨木さんは徹底した放浪者であり、その行動は正に天衣無縫と言つてよく、途方もなくコダワリのない大きな風格の持主だつたと思ふ。

最後に司会者の松方氏が、理事としての茨木さんは、仲々事務的によく会務に尽され、これは案外多くの人に見がされているのではないかと、同氏の別の一面にふれて、まことに意義深い追悼会を終つた。なお飾られた作品を見て思い出にふけり立ち去り難い人々が二、三にとどまらなかつた。久々に古い会員も多く参集され、会としても珍らしく印象に残るよい集りであつた。参会者は五十名、会員以外にも鶴田画伯夫妻、堀氏、茨木夫人の実姉大野英子氏、茨木氏の姪菅原温子氏らも出席された。なお茨木さんのお墓は富士山に

面した横浜市中区久保山墓地にたてられている由である。(望月記)

茨木画伯の年譜

小野 幸

いま、わたしは茨木猪之吉画伯の年譜をつくつて見たいと、資料をあつめているので、その一端をノットして見ようと思ふ。

画伯がなくなつた、というより穂高岳にむかつて濁沢小屋を出立されたのが、昭和十九年十月二日その日からその姿を見ることができなくなつたのであるが、その日から数えてみると、もう一昔半にもなつてしまつたのである。わたしは、まだ茨木さんが、この世にいられて、ただ、会わずにいるだけだと思つてゐる氣ばかりしている。

ルームの土曜会もわたしは、ほとんど出席しないのだが、この昔の会員について古い連中はともかく、新しく入つた人たちは、ほとんどその名を知つてゐるくらいが関の山となつてゐるしまつた、私は自分の知つてゐることを、なんでも他人が覚えていくてくれるのだという、無責任な考えを、こどもも改めなければならぬと思つたそんなことを考へて、茨木さんをあまりよく知つておられない会員のためにも、記して見ようと思ふのである。

○茨木さんは幼にして養子に行

かれたんだ、ということとは最近になつて、大野英子さんから聞いたのだつた。大野さんは茨木さんの奥さんの実姉にあたる方で、やはり先生のおられた大井にすんでおられる。

明治二十一年五月一日、静岡県富士郡岩松村岩本にこの声をあげたのである。まず、これが書き出しになる。影山伊之吉、後の山岳画家、茨木猪之吉である。そして、四歳で横浜市の茨木家の養子になられるのである。それから、明治二十七年横浜市私立真砂小学校入学、同じく三十四年この小学校をめでたく卒業、引つづいて神奈川県立中学校に三年まで学び中途退学、この頃から画に興味を持ち出されたいらしい。

明治三十八年、京都市高等工芸学校教授の洋画家浅井忠の門に入り、二年間洋画を学んでいたが、同氏物語のため、帰京して小山正太郎塾、不都合に入る。この望の間もなく太平洋画会研究所に合併され、中村不折に師事するのである。明治四十年、東京博覧会に油絵入選賞を得、同年秋文部省第一回美術展覧会に油絵風景が入選している。

これから山の連中、特に小島烏水会員あたりと親しくなり、そのまゝ小諸時代に入るのである。丸山晚霞の推薦で長野県小諸町立小学校図画選科教師として三年間奉職しているが、その間にも太平洋画会展覧会で水彩風景は宮内省お買上となり、文部省第六回美術展にも水彩が入選している。大正二年職を辞して上京、再興の日本美術院に院友として推せん

され、洋画部に三年研究し、平和博覧会に油絵風景入選、その他二科会に四回、春陽会に三回入選している。

茨木さんの画は二十歳の明治四十年から展覧会に出され、このように絵舞台をかざつてゐるが、その作品が印刷されて一般人の目にふれたのは、小諸小学校で出版された「浅間山」であらう。この本は明治四十三年に初版が出され、その翌年に再版が出されているが三版は出なかつたのである。その本の凡例には「特に本書のために序文の筆をそめられたる小島烏水君、挿画を揮毫せられたる茨木猪之吉君に向つて謹みて、感謝の意を表す」とある。もうこの頃は猪之吉という雅号を作つてゐたので、それまでは「不仙」と称してゐたのである。

この「浅間山」の挿画は第三二頁と第三三頁の間に別ページとした「北上州鬼押出の遺跡」という浅間山と前景に二人の旅人を画いたものである。

つぎに思い出すのは、明治四十四年七月十日発行の小島烏水著、「日本アルプス」の第二号にある木版淡彩二席別の「山中の宿、十一月二十日」とある。これは富士山麓の山中湖の中野村の画である。これと水彩画の三色版で「本栖村」とあり、画面には「本栖の山中湖と同じ紀行中の作品で、南アルプスに行かれた明治四十二年(この頃まで不仙を称ししてゐた)以後のものと思ふ。このほか「日本アルプス」の第

三巻には「富士山の西面と裾野の一部」と「山上の烏水」、第四巻には「初夏の浅間山」が印象に深い。

先生の最後の便りとなつた、昭和十九年十月一日づけの自宅へ出されたはがきの全文を写してみよう。

「上高地での十二号と十号は仕上げて、徳沢一泊して濁沢小屋に登る。紅葉が今盛りでとても美しい。三十日は終日雨で小屋主人と著者と四名で炬燵でくらす。今日は十月一日、天候まだ良ろしくない。明日早朝、山越して飛騨側に下り、槍見温泉に泊り、更に高原川を上り、平湯温泉泊り。この付近の山村風俗を見る。安房峠を越して上高地へ戻り、画をまとめて帰京のつもり。松本市へは七八日頃になるでしよう。宮坂君上高地で滞在している。昇さん二十六日に帰京。山下品蔵さん二十五日に帰京、今は淋しい、全く静かで勉強するにはよろしい」とあり、この翌朝、穂高小屋から白出沢をくだつて槍見温泉へ向つたまま帰られなかつたのである。

日本山岳会関係の資料で、茨木さんを追憶したもの三つほどおぼえている。

昭和二十三年十一月に「山岳」を復刊して、初号、即ち、第四三年第一号に中村清太郎会員と交野武一会員がそれぞれ記されている。中村氏は「茨木猪之吉君追憶」として、小諸時代、文展「北国街道」初期の文展時代などを思い出され、交野氏は「茨木さんを憶う」

として、晩年、昭和十八年の春の
蓼科池の平への数度にわたる製作
旅行と、そこに生活されていた交
野氏の生活をおり込んで述べられ
ている。

この他、会報第一三四号に望月
達夫会員が「茨木さんを憶う」の
文章があり、塚本繁松書記の「茨
木猪之吉氏遭難報告書」がある。
茨木さんの唯一の著書である、
「山旅の素描」は昭和十五年十二
月十日に東京神田の三省堂から発
行されている。再版は昭和十七年
七月五日になされているが、初版
にくらべて紙もわるく、寸もみち
かくなっている。この他、登山雑
誌や単行本に書かれたものもある

滝谷の遭難について

春 田 俊 郎

昨年十月十八日洞沢において合
宿訓練中の東大スキー山岳部員が
滝谷登攀中に遭難六名が死亡する
という事故が生じた。合宿に参加
した十三名の上級部員（内一名は
OB）が五パーティにわかれてそ
れぞれ滝谷に向つたが天候悪化に
より途中から引返した一パーティ
を除き、クラック尾根パーティは
二名のうち一名が稜線の数十米下

で疲労凍死、第一尾根パーティ三
名は引返してB沢を上る途中、表
層雪崩に遇つて一名が流され、辛
じて埋没を免れて岩穴で三名とも
ビバーク後生還（ただし同じ岩穴
でビバーク中の西朋山岳部員二名
は疲労凍死）第三尾根パーティ三
名は中央稜ドーム直下で全員疲労
凍死、第四尾根パーティ三名はC
カンテから引返してC沢で表層雪
崩に遭つて、一名埋没死亡、一名は
発掘後死亡、残りの一名が重傷で
救出という事故で、十月半ばとい
う季節、別々に行動していた各パ
ーティがことごとく遭難している
点など、大学山岳部としては極め
て珍しい出来事であつた。原因に

つては当然東大スキー山岳部で
連日にわたる反省、批判が行われ
部のあり方、合宿の形態、登山の
目的意識等についても鋭いメス
が加えられているが、直接的な原因
について検討を進めることにする
▼メンバーの体力について
十三名のうち大部分は、十五、
六の両日、約十六貫の荷を背負つ
て、横尾まで春山合宿の資材を運
搬、十一貫の荷で洞沢のキャンプ
に入つてゐる。事故前日の十七日
は快晴で、十八日とは違う編成で
クラック尾根、第三尾根、第四尾
根を何の危険もなく登攀に成功し
ているが、最後尾のパーティは午
後七時半に帰幕している。年齢二

十歳前後で、日常からトレーニン
グを続けた上、年間百日内外の登
山をしていた大学山岳部員であつ
ても、試験直後という事情も考慮
すれば、この前日までの行動によ
りかなり疲労が蓄積していたもの
と考えられる。事実、北穂南稜を
登る時にさえ、ペースは遅かつた
し、滝谷の下部の取付付近から相
当疲労が現れて来たことが認めら
れている。この過労が疲労凍死を
早めたものと思われる。
▼メンバーの技術について
全員とも無雪期の滝谷は少くとも
三ルート登攀しており、一年の時
から夏山、秋山、冬山等の各合
宿や岩登り合宿、強化合宿等にも
参加していたメンバーであるので
技術的に未熟であつたために生じ
た事故とは考えられない。しかし
積雪期の滝谷の経験のあるものは
少く、研究が不十分であつた点や
積雪期の岩場に対する心構えが安
易に過ぎた傾向は否めない。
▼天候の予測について
パーティのなかには気象担当者
がいたし、携帯ラジオを持ってい
て、全員ラジオの気象概況により
天気図を画く能力はそなえていた
しかし、前日の十七日は疲労が多
く、翌日の行動を考えて早く就寝
してしまつたので、天気図を画か
ず、天気予報のみに頼つた。その
ため台風の接近は知つていたが、
前線の動き等の詳細は知らずにい
た。NHKの気象概況が夜十時だ
けという点も登山者にとつて不便
であるが、前夜それを聴かなかつ
た点は責められるべきであらう。
しかし全国的な連絡網と大規模な
資材や設備をもつ測候所において

ニューヨークに来て二カ月経ち
日常生活にも慣れて来たころに、
A・A・Cを訪ねることにしまし
た。A・A・Cはマンハッタンのイ
ーストサイド・パークアベニュー
とレキシントンとの間、九十丁目
にある赤いレンガの三階建のビルに
あります。すべて、アポイントメ
ント無しには訪ねられないこちら
のしきたりにしたが、前夜電話
しましたところ、紹介状の宛名の
方、書記のヘレン嬢はすでに結婚
退職なさつたとのことでしたが、
後任のコーリヌ嬢が気持よく迎え
て下さいました。ここは一、二階
がA・A・Cのオフィスになつてお
り、三階にこのセクレタリーのコ
リーヌ嬢が住んでいます。早速日
高会長に頂いた紹介状や、忙しい
なかを羽田まで沼倉さんが届けて
下さつたJ・A・Cの旗と「山岳」
それから歓送会をして下さつた折

に、A・A・Cに届けるようにと折
井さんに頂いたJ・A・Cのペン
ト等を差出すと、コーリヌ嬢は大
変な喜びようでした。コーリヌ嬢
はヨーロッパ育ちのきれいな方
です。A・A・Cのセクレタリーを
なすつていて、彼女も山がお好
きとあつて、J・A・Cのこと、A
・A・Cの事等二時間余りもおしや
べりをして楽しくすごすことが出
来ました。桑原武夫さんもつい最
近、A・A・Cに見えられ、スライ
ドと講演をなさつたという話でし
たが、丁度昨日届いたという「チ
ョゴリザ」が日本語版なので整理
出来ないというコーリヌ嬢に、つ
たない英語で説明したり、カード
作りを手伝つたりして、本当に來
てよかつたと思つたことでした。

米国山岳会を訪ねて

限 部 恵 子

A・A・Cのプレジデントであつた
ジョン・オボリンと婚約をした
ということ。今彼はオハイオ
のクリーブランドに住んでいます
が、ニューヨークにもちよいちよ
い出て来るので私にも紹介して
くれるとのことでしたが、J・A・C
の「ヨコマキ」とも親しい等と話
してくれました。「ヨコマキ」は
横有恒氏のことです。チョゴリ

ザの写真集が届いたばかりのとこ
ろでしたので、その写真を見たり
私が持参した、日本山岳写真家協
会の日本の山の写真をみたり、ち
ようど私が持参していた、上高地
の写真の中の藤平さんと、チョゴ
リザ写真集の中のヒゲザの彼と
を較べて笑つたりしました。
ニューヨークには山らしい山が
ないの何と残念ですが、その
中にどこかに連れていつて貰える
そうです。二月六日にあるA・A・
Cのスライド月例会にも呼んでく
れるそうです。どんなに困窮が違
ついても、山が好きというだけ
でよいお友達が出来、これから先
のニューヨーク生活も楽しいもの
になりそうだと、紹介の労を取つ
て下さつた、会長はじめJ・A・C
の諸先輩に大変感謝しています。
二月二十一日（在ニューヨーク）

も、秋期の予報の信頼度は十分でないから、登山者に地形的な変化や微気象上の問題を含む山岳地帯の天気の的確な予想を求めるのは無理であろう。同じ日八ヶ岳で遭難死亡した気象庁職員は天気図を画いた上で、十八日は晴天と判断したといわれる。

▼出発前後の天候の判断について
十八日朝、瀧沢は高曇りで、時々、二、三分間ぐらいい、気づかない程度の小雨であり、午前六時過ぎ、瀧沢を出た頃も同様であった。北穂南稜の途中で一時的に濃霧となり、かなりはげしい降雪があつたが、殆んど無風で気温も高く湿雪であつた。(この霧と降雪は南稜よりザイテングラードの方が遥かに激しく、ザイテンを経て第四尾根に向うはずのパーティは登攀不能と判断して、ザイテンの途中で引返して)北穂頂上からB沢、C沢を下るため稜線を歩いていた頃は、霧も晴れ、雪も止み、再び高曇りになつて、しかもところどころ雲が切れそうに明るくなつていた。ここで瀧谷登攀は不可能ではないと判断したわけで、ここまでの様子では、その後の豪雪や気温の急激の降下は予想されなかつたらしい。結果からみれば、明らかに判断を誤つたわけであるが、最悪の場合の予想をせずに行動した点は慎重であつたとはいえない。

▼当日の天候について

午前九時頃から本格的な降雪となつたが、依然として気温高く湿雪で、瀧谷側は殆んど無風であつた。午後から気温が降り粉雪となり、瀧沢側から風が吹いて、やが

て猛風雪となつて翌十九日正午過ぎまで続いた。クラック尾根のパーティは行程が短いので登攀を続け(リーダーは下降した場合雪崩の危険度の方が多しと判断した)第三尾根パーティも下降の困難を考へて登つたらしい。第一尾根と第四尾根のパーティは正午過ぎ登攀を諦めて引返している。行動を起してしまつた以上、このあたりでの判断の正否は、微妙な問題である。この日の降雪は福島清毅氏の話によると乗鞍肩の小屋で積雪一米に達し、この数十年間に十月としては記録的なものであつたといふ。また同じ日、八ヶ岳、奥秩父等の比較的安山山岳で遭難続出したところを見ると、よほどの異常気象であつたことは想像される。しかもその後、十一月十日頃まで殆んど降雪がない点からみれば、しな運も手伝つてゐるといえる。しかし過去においては、十月中旬の大雪や風雪はしばしば記録されているから、決して不可抗力であつたなどという言逃れは許されない。

▼雪崩の判断について

第一尾根を下つて沢に入つたパーティは第一尾根とクラック尾根の間の枝沢で小規模な雪崩を見て初めて危険を知つたという。そしてB沢に入つたとたん、先頭の名が流されてゐる。第四尾根を下つてC沢に入つたパーティは雪崩の危険を充分に予知し、可能性の最も少ない岩稜に沿つて行動しながら、まともに流されてゐる。十月であるので多少の油断もあり、もし十一月であつたらこのような危険をおかすなかつたであろう。瀧谷というところは、季節に関係

なくたとえ十月であらうと九月であらうと、雪さえ降れば、瀧の流れのように絶えず雪崩の落ちるというところを、更に把握し、予知すべきであつて、十月には雪崩が殆んどないなどという先入観を捨てねばならぬことを痛感する。

▼合宿とリーダーについて

戦前ならば、東大スキー山岳部には、各高校山岳部で体力も技術も十分訓練された者だけが入部し一つ一つの登山がそれだけの成果をあげた。しかし現在の高校は山岳部のない高校もあり、技術的な面は望めない上、山行日数も極めて少ないので、大学山岳部が、初歩からの訓練の場となり、短期に登山者を養成するという困難がある。そのため部は多少とも背伸びをする傾向が見られ、潜在的な危険が宿つてゐる。また合宿は競技の試合のような責任感と闘志を燃やすので、合宿だからという考えで個人の能力の限界以上の行動をする危険も藏している。またリーダーは体力と技術は優れていても、全体的な判断の能力が不足し勝ちであり、慎重さよりも若さや情熱に走る危険も全くないとはいえない。瀧谷で四パーティにわかれて行動する際にも、行動するか引返すかチーフ・リーダーの断が必要で今回のように各パーティの判断に委せられると、闘志と自信と自尊心に左右され、なかなか引返す勇氣と決断が下せぬ危険性もある。

その他今回の遭難の原因には直接的、間接的な種々な要因がありなかに防ぎ得ない必然性もあつたかも知れない。いずれにしても



会 員 通 信

大学山岳部の問題点を衝く事柄も含んでいると思われ、今後この種の事故を起さぬように、各方面からの御批判や御叱正をいただきたく思う。終りに当り、今回の遭難によつて各方面に多くの迷惑と御心配をおかけした点を深くおわびし、また各方面から寄せられた御援助と御好意に対し深甚な謝意を表明する次第である。

快晴の飯豊山

名須川 浩

八月一日から六日まで、上赤谷の井上英橋君(五十三歳)を案内に、同村の青年小柴君(北股岳まで荷あげをして貰う)と愚息と一行四人飯豊山を歩いてきました。八月一日東赤谷駅より湯の平温泉小湯泊、二日北股岳直下幕営、三日北股岳より山稜伝ひ文平の池露営、四日大日岳、小大日に遊び飯豊山直下露営、五日切歯尾根(ノコギリ目尾根)を降つて飯豊温泉泊、六日長者原よりバスで玉川口駅に出ました。山では連日快晴で、それぞれの山頂から展望を恣にするこ

ができました。中でも切歯尾根から眺めた飯豊山、大日、御西、北股、地神さらけに帆差岳までの連峰百八十谷の展望が一番で、北面や東面の谷に食い込んだ残雪が見事でした。至るところお花畑がきれいでしたが、それよりも案内人の親切な行動がとくに楽しい印象として残っています。

「残雪の美、海内に比なし」に始まる沼井鉄太郎氏の飯豊山紀行は「山岳」第二十三年第三号にありますが、昭和二年その刊行のときこれを読んで以来、一度はこの山に登つてみたいと思つていましたが、この度すべてよい条件の下に実現できたことを嬉しく思つております。

正月の八溝山

日高 信六郎
古沢 肇

十二月三十日、勿来―入旅人―青生野―川上―湯岐―堀―下野宮―蛇穴―八溝山―中ノ沢―上南方―黒羽―西那須野―磐城のチベットと呼んだ土地の人に叱られるかも知れない。勿来の駅から入つて入旅人(いりたびうど)などという淋しい村落を通つて、水郡線の塙駅まで達するおよそ四〇キロの山間は、切れ切れの雪におおわれた丘陵が続いて寒々としていた。小山のかげに人家があり、また小山があつた。朝日山(七九七米)というのがこの辺で一番高いと聞いて見回したが、どこが頂上かわからない。農家の軒先には、こんなにやうく一杯干してあるのも妙に忙しかつた。湯

岐(ゆじま)という、晴から八キロ山奥のひどくぬる温泉で新年を迎えた。この辺は旧正月なのだからいつこお正月らしくない。八溝山(一〇二米)へは正月二日、蛇穴(茨城)から登った。霜柱を踏みながら。途中、那須日光の連山がよく見えた。名前のわからない山がまだ沢山あるのにおどろいた。下りには棚倉管林署の道が立派なので、栃木へ下るつもりがうつかり福島側へ向ってしまった。下りかけてそれと気がついたが、どうせ急ぎの旅ではない、中ノ沢で泊めて貰ってランブの一夜を送った。四日旅の最終日、連日の好晴、下野へ下って那須の名刹、雲巖寺へ立寄り黒羽へ出た。茫々とした那須野の一角から八溝が遠くに見えた。五万の地図二枚に亘るほどの拡がりを持ちながら岩も麓もない平凡至極な山で、その平凡さのゆえに何となく心ひかれるような山だったと思う。

図書紹介

ザイル

——強さと正しい使い方——

梶原 信男著

上から落ちてくる人をザイルで確保するというのは、非常にクリティカルな問題を提供する。制動確保の応用により、今日でこそこうした確保の可能性も開けてきたが、従来の方法で確保する限りは確保者がはねとばされるか、ザイルが切断する例が非常に多いので

ある。しかもこうした確保例や研究が少ない現在、ザイルや確保については伝説的な迷信が横行している、確保技術の教科書でこうした点を一つこんで述べているものも少ない。

こうした折、ザイルの性能を詳しく論じた本書の発刊は、まことに時宜を得たものということができる。本書はロープの専門家梶原氏の、実験に基づいた報告であり金に糸目をつけず、ふんだんにザイルを切断して答を出しているのである。

しかし本書はあくまでも学術的な報告であつて、登山技術そのものを取扱ったものではない。岩登りなどで予想される各種の状況を想定して、これを抽象化した実験に移し、これから間接的に答を求めるという行き方によるものではないわけである。本書においては非常に広範な実験に及んでいるしかしこれをもつて、登山におけるすべての問題をつくしたと考えたら、早計におちいるかも知れない。

次に登山技術上気のついた点に触れると、例えば六十六頁に、ステナワとしてはマニラで十分であつて、ナイロンを使う必要は特にない。と述べられてあるが、この文章からは、ステナワとしてナイロンの方がマニラよりもベターだという印象を受ける。これは登山技術上の通説(少なくとも私の見た所では)からいささか異様な見解である。

また八十五頁には「練習用で確保者が上におり、登攀者が下にあるようなときの確保はマニラザイル

ル一二ミリでもよい。動的確保を必要とするような高級技術の訓練はテリレン・テトロン・ナイロン

一ミリを用いるがよい」と述べられてある。これによると動的確保(制動確保)にマニラは不適当なような感じを受けるが、私個人の考え方としては、初心者はいくらかマニラで十分練習し、ザイルさばきが上手になつてから雪山で便利なナイロンに移るようにつきべきではないかと考えている。ナイロンは岩角などにかけると極めて弱いから、初心者にはすめたくないような気がする。確保というものを真剣に考えている登山者グループで、今だにマニラを主として使っているところがあるのは、必ずしも価格の問題だけはあるまい。こうした二、三の点ちよつと気がなつたが、私の思いすぢであれば幸いである。

いづれにしても、本書に述べられてある諸注意に従つてザイルを取扱い、また制動確保を用いる限り、従来見られたようなザイル切断事故の大部分は予防することができると信じる。ザイルを製造、販売する人のみならず、使用する登山者にも是非一読をすすめる。

本文八九頁、昭和三十四年七月三十日日本工業新聞社大阪支社発行、三五〇円(金坂一郎)ガッシャーブルムIV

F・マライニ著

一九五八年イタリア隊の登攀報告が立派な本になつて、イタリア山岳会々長ベルネリ氏から本会に寄贈された。筆者はわれわれに

なじみ深い本会々員のマライニ君である。

はじめ目標としたガッシャーブルムI(ヒドンピーク)は共願のアメリカ隊に許可が下りたためG IVに転じた八名のイタリア隊がラウルビンディから飛行機にのり、ナンガパルバットをかすめてスカルドに飛び、一トンの荷を四五〇人のポーターに背負わせて山に入り、バルト氷河の奥にBCを置いて、急峻困難をきわめる地形と悪天候に阻まれながら、執拗な力闘をつづけて頂上をきわめた経過を詳述し、その間にバルジスタン地方とその住民の説明や、おもな山とその登攀の歴史をおりまぜ民族学者らしい観察やリイゾンオフイサーとの度重なるイザコザなどを軽妙な筆致で綴つた好者は四十頁にのぼるきれいな写真(その半分はカラー)と地図や見取図と共に読者を魅了する。

登山隊は七月二十三日BC(五一五〇米)から行動を起し、ガッシャーブルム南氷河上にCI(五六〇〇)CII(六二〇〇)CIII(六三三〇)CIV(六九〇〇)とキャンプを進め、ガッシャーブルムIII峯との鞍部に出て稜線上にCV(七一〇〇)を設け、ボナッチとマウリの攻撃隊は頂上をめざして七月十日から四日間二回の攻撃を試み頂上から高距三五〇米のところまで登つた結果、急峻な山稜は困難で長く、さらに一つのキャンプを要することが明らかになつたが、モンスーン期に入つて吹雪となつたため、危険を冒して十九日BCに下つた。

天候回復をまち二十四日から再

挙を計り、前記の二人は、ゴッビ(副隊長)デフランチェス二人のサポートを得て、非常な困難を克服しCVI(七五五〇)をつくりきり七八五〇米まで登つて三五〇

米の固定網を張つた。一日休養の後八月六日二人は北峯を越えて巨大な雪庇を冠した狭い岩峯の頂上(七九八〇米)に達することが出来たが、暁から崩れはじめた天気はこのときと險悪となり、大苦心の末十八時十分CVIに戻つて暴風下の寒い夜を過し、翌日吹雪のなかをCVに降つてサポート隊に合した。この時デフランチェスが百米あまり滑落する椿事が起つたが、大事にいたらず、その日のうちに一同CIVに下つてカーシン隊長を迎えられた。

一行八名のうち五名はガイドであつて、アタック隊の二人はモンブラン南麓で氷雪に馴れ、サポート隊の二人は東部アルプスの岩塔のばりに長じ、おのおのその特長を生かして交互にトップをつとめた。登頂の二人は酸素なしで、CVIらしい実動十五日間に四回の頂上攻撃を続けて成功を収めた。その強さとなげばには驚く外はない。ボナッチの手記は疲れ切つた心身を頼つて奮闘した苦しきや登頂時に精神朦朧となつた次第を卒直に語つてところよい。しかしBCに帰りつた時みなへバリ切つて別人のように見たなかにボナッチ一人は殆ど平素に変らなかつたマライニが激賞している。

帰路近くの日本隊を訪問した部分は面白くから別に全訳をのせることにした。付録に①入山許可書と入山規則

②ポーターに給与すべき食料③ポーター賃金表④高所ポーター氏名表⑤K2の名称について⑥詳しい写真説明がついている。

布装、二四八頁×一七〇mm
本文三二二頁、写真四〇頁（内カラー二〇頁）
レオナルド・ダ・ヴィンチ社発行
（日高信六郎）

ネパール文献目録

Nepal Bibliography 1969

神原 達 編

神原君が山岳会のルームヘコッソと通つて、ネパール・ヒマラヤに関する文献の調査をしていたのは、つい最近のような気がするが、それでも今から五年前のこと、彼が早大の東洋史料へ入学したこのことであつた。そしてこの五年間の間に彼が集めた欧文の文献を整理したのがこの文献目録である。序文に編者が述べているように、整理過程の暫定的な目録であるには違いないが、それでも、ネパールに関する文献目録を六点、ネパールに関する著作物、公刊物五〇点、ネパール語並に辞書二九点、B・H・ホドソンによる著作目録一七四点、エベレストに関する文献四七点、ネパール・ヒマラヤに関する文献一八八点、他に地図に関する目録とその内容の豊富なことは驚嘆に価する。エベレストに関するものだけで四二七点も文献があることを私は編者の労作によつてはじめて知つたような次第である。

当然のこととはいえ、欧文でまとめた、これに邦文の序文をつけたことはよかつたと思う。これに

よつてネパールに関心をもつ世界中の登山家や学者の間で、本書の利用度は高まり、貴重な文献として必ずや反響があるに違いない。なお編者は念願かなつてカトマンズのパブリック・サイエンス・カレッジの招待により、この三月にカトマンズへ出かけ、この三月にこの目録を完璧なものとして帰れることを期待している。そして一九六一年には是非ともこの目録の決定版を刊行されることを切望して止まない。

A五版、一一二頁、昭和三十四年十二月発行、頒布先明文堂、頒価五〇〇円。市販されてはいないが希望者は直接明文堂へ申込みば入手できる。（松田雄一）

天国・地獄・ヒマラヤ

レヒエンベルク著

福田 宏 年 訳

会報二〇〇号の図書紹介欄に私は本書の原書である *Himmel Heile Himalaya* の紹介を書き、その末尾に「ヒマラヤ研究者には一読の価値があろう」と書いたことを記憶している。その邦訳書がこの程原書より立派な装幀で刊行されたのだからこんな嬉しいことはない。その内容については原書の紹介を参照していただくことにするが、本書はヒマラヤ登山を種々なエピソードを入れて解説している

のでヒマラヤの専門家でなくても面白くよめるし、訳文も非常にすつきりしている。ただ非常に残念に思われるのはマナスルの項が事実と大分かけはなれていることである。この本を読むような読者なら、

マナスル登山については知つてい

るはずである。それだけに、折角ここまで面白く読んできた読者も最後へ来て少々面喰ひ、ひいては本書の内容そのものについても疑惑をもつに至るに違いない。本書の内容がこの種の本としては比較的正確であるだけに、余計に残念に思われてならないのである。

引用文献に邦訳の補足をつけるだけの余裕があつたのだし、固有名詞の表記などについて深田久弥氏の「ヒマラヤ登攀史」を参照にする余裕があつたのだから、マナスルの項は、ケネス・メーソンの「ヒマラヤ——其の探検と登山の歴史」のように、出来る限り正確を期す補足訂正をしてもらいたかつた。

なお細かいことだがテントのことをツェルトと直訳しているが、日本ではフォースト・ビヴァーク用のツェルト・ザツクを省略して天幕と区別してツェルトという習慣があるので、テントとした方がよかつた。このような表現法が二、三眼についた。

A五版三五二頁、一九五九年九月、明文堂発行 七八〇円
（松田雄一）

会 務 報 告

十一月理事会 十九日ルーム

出席者 三田副会長、理事浜野、太田、金坂、越智、川上、田島、田村、古沢、千谷、松丸、評議員岩永、望月、監事諸岡、関西支部津田、藤沢

マ議事と報告

①ヒマラヤ装備保存の件、管理責任者金田、竹田とする。

②図書借出の件

③福岡岳連立山登山講習会に講師派遣の件

④読売スポーツ賞の件

十二月理事会 三日ルーム

出席者 日高会長、理事浜野、金坂、太田、古沢、田村、川上、千谷、山崎、日下田、徳久、田島、高橋、評議員岩永

マ議事と報告

①新入会員申込の件

②新入会員紹介者資格の件

③山日記は本年度会費納入者に限り贈呈する件

④会員名簿の件

⑤昭和三十五年国際スポーツ行事計画の件

⑥登山技術講習会の件、明年三月西穂高で行う、経費六十万円

⑦読売スポーツ賞、該当する者なし（山岳部門）

⑧山岳の件

十二月緊急理事会 十日ルーム

出席者 日高会長、松方副会長、理事浜野、金坂、山崎、田村、太田、川上、千谷、古沢、高橋、監事野口、諸岡、評議員岩永、小原、交野、望月、ヒマラヤ委員辰沼、折井、村木、松田

マ議事

①ヒマルチュリ登山慶大より申込あり、山岳会後援として承認

②一九六一年度外貨申請の件、ヒマルチュリ（山岳会）二万ドル、サルトロカンリ（京大）二万二千ドル

一月理事会 十三日ルーム

出席者 三田副会長、理事金坂、田村、日下田、越智、古沢、田島、太田、川上、高橋、山崎、監事野口、諸岡、評議員成瀬、岩永、早大山岳部吉阪、今村俊、同志社山岳部津田、平林、江上

マ議事と報告

①早大マッキンレー遠征に山岳会後援の件、承認

②登山靴検定の件

③登山技術指導者講習会の件

④同大ヒマラヤ遠征の件、山岳会後援とす

海外登山審議委員会議事録 二月四日ルーム

出席者 日高、三田、成瀬、渡辺、小原、金坂、（委任状）今西

マ議事

①ヒマルチュリ登山の件報告

慶大山岳部のヒマルチュリ登山承認に伴い、今春を予定していた南面、西面の偵察行は中止するが、会としてのヒマルチュリ登山は独自に研究して行く。

②海外登山隊後援の件報告

慶大山岳部のヒマルチュリ登山、早大山岳部のマッキンレー登山及び明大山岳部のマッキンレー登山の後援を承認した。

③海外登山外貨割当申請の件報告

一九六一年度ブレ・モンスン期本会ヒマルチュリ登山（一九、四三、五五）今春早大山岳部マッキンレー登山（三、七二〇）

同じく、同志社山岳部アビ登山（四、八二四）合計二七、九八三

三の外貨割当を申請し、大蔵省、体協よりすでに非公式の承認を得た。

④本委員会組織変更の件

日本山岳協会の設立に伴い、本委員会の業務を左記規程規約のように海外登山計画の比較審査に絞る、その他の業務は新設するヒマラヤ委員会に委嘱する。

海外登山審議委員会規約

第一条 本委員会は、海外登山審議委員会という。

第二条 本委員会は、本会理事会の質問に応じて、海外登山計画を比較審査する。

第三条 本委員会には、委員長一名および委員若干名をおく

第四条 委員長は、本会会長の兼務とし、委員は理事会の決議により委嘱する。

第五条 委員の任期は三年とする。

第六条 本委員会の会議は、委員長が招集する。

委員として左記の十七氏を推薦したい。

日高信六郎（委員長）松方三郎

三田幸夫、横有恒、入沢文明、

今西錦司、渡辺公平、竹節作太

成瀬岩雄、堀田弥一、小原勝郎

加藤泰安、望月達夫、今西寿雄

辰沼広吉、金坂一郎、村木庸益

⑤ ヒマラヤ委員会設置の件

議案第四号にもとづき左記規約

による委員会を設置する。

ヒマラヤ委員会規約

第一条 本委員会はヒマラヤ委員会という。

第二条 本委員会は、海外登山

に関する調査、研究、企画および実施をなす。

第三条 本委員会の委員は理事

会の決議により委嘱する。

第四条 委員は互選で委員長を

推挙する。

第五条 委員の任期は、三年とする。

第六条 本委員会の会議は、委員長が招集する。

第七条 委員長は、必要に応じて、実行委員を委嘱する。

第八条 実行委員の任期は、一年とする。

委員として差当り左記の五氏を推薦し、必要に応じて増員するものとする。

三田幸夫（委員長）成瀬岩雄、

小原勝郎、金坂一郎、村木庸益

実行委員として差当り左記の四

氏の残務整理にあたる。

石坂昭二郎、松田雄一、竹田寛

次、山野井武夫

⑥ その他

議案第四及び五号に関連し、会

報一九四号における「海外登山

審議委員会規定」を廃止し、同委員会、海外登山研究委員会及びヒマラヤ登山準備委員会を解散する。

議案第四及び第五は二月十一日の理事会に上程し、承認されれば即日発効とし、新委員は一九六〇年度委員として就任願いた

い。

二月理事会 十一日ルーム

出席者 日高会長、理事渡辺、

太田、金坂、山崎、古沢、川上、

田村、日下田、徳久、高橋、監事

諸岡、評議員岩永、望月、交野、

東京支部折井、慶大宮下、田辺

▽議事と報告

① 慶大ヒマルチュリ隊外貨増額の

件

② 登山技術研究委員会規約の件

③ ニュージーランド女子登山隊の

件

④ 入会金増額の件

評議員会 二月二十四日

▽場所 本会図書室

出席者 日高会長、評議員望月

入沢、岩永、支部長高山、津田

（委任）藤木、西堀、島田、池田

▽議事および報告

① 主要事業報告

② 入会金値上げの件

③ 新年度役員の件

三月理事会 九日ルーム

出席者 日高会長、三田副会長

理事渡辺、浜野、太田、金坂、山

崎、日下田、田村、古沢、徳久、

監事野口、評議員望月、岩永

▽議事と報告

① 西穂講習会の件

② 駒ヶ根夏期講習会の件、八月一

日一六日、高校生を対象とし、講

習員百五十名、講師三十名、費用

約二十七万円

③ 山岳協会の件、アマチュア規定

で体協理事会より却下された。

④ 台湾山岳会から渡日招聘の件

⑤ 毎日新聞登山講習会の件

⑥ 入会申込の件、理事会で入会許可後会費、入会金をとるようにする。

⑦ 朋文堂より日本山岳全集出版の

件、山岳会協力申込あり、了承す

る。

日本山岳協会設立申請

日本山岳協会の設立準備につい

ては会報二〇六号に報告した通り

であるが、四月一日より発足すべ

く二月二十三日付体協に加盟申請

を行った。なお日本岳連の希望に

より理事に村松清、松長晴利両氏

を追加したので、本会側理事とし

て高山忠四朗、中田勇吉両氏に追

加就任願うことにした。

◇第二〇三回小集會 昨年の八方

尾根における小集會にならつて、

二月二十日（土）夜蔵王のドック

沼近くの山形山岳会の小屋で開催

とくに論議は持たず、懇談会形式

とした。参加者、北海道一名、宮

城一名、福島二名、新潟四名、

東京二名、熊本二名、地元山形

では参加者多数につき人数が制限

される始末で九名、計五十名とい

う盛会。日高会長もスキーを持

たが徒歩で参加された。このところ

比較的雪の少なかつた蔵王だが、

珍しくアイスバーンがかくれるほ

ど新雪に恵まれ、汽車も予想に反

してガラ空きという恵まれた旅で

ある。来年はザラメ雪の吾妻山な

ど如何でしょうということになつ

た。設営につき後藤山形支部長以

下の諸比に大変御厄介を掛けた。

ここに御礼申上げる次第である。

四九六九 中村元次郎 東京都新宿区上落合二ノ五四一(安彦六郎、折井健一)
四九七〇 景山 孝正 世田ヶ谷区野沢町一ノ九〇(松丸秀夫、鳥井鉄也)

会 員 計 報

大橋進一氏(会員番号三四番)昭和三十四年十一月二十九日狭心症のため逝去。享年七十四。
富田治三郎氏(会員番号三六七番)昭和三十五年二月逝去。
三木高嶺氏(会員番号七六〇番)昭和三十五年二月二十九日逝去。
岡本信三氏(会員番号一三四三番)昭和三十四年十二月逝去。

本会は謹んで哀悼の意を表する。

海外登山歓迎会

海外登山歓迎会は三月一日午後六時から新丸ビル地下ポールのタビで開かれた。慶大ヒマルチュア登山隊(隊長山田二郎)同志社アビ登山隊(隊長津田康祐)東海山岳連盟ジュガール・ヒマル登山隊(隊長伊藤久行)欠席。早大マツキンレー登山隊(隊長吉阪隆正)明大アラスカ学術調査隊(登山隊長交野武一)およびネパールにヒマラヤ研究のため留学する神原達氏の歓迎、あわせてベル登山隊吉田正文、台湾登山より戻った西丸震也両氏の歓迎が行われ、西丸氏より台湾登山協会から日本山岳会へ記念のためおくりられたベナントが手渡された。

東京支部会務報告

理事会 (一月六日)

山田温泉スキー講習会打合せ

理事会 (二月三日)

山田温泉スキー講習会報告
八ヶ岳スキー講習会の件 (二月

十二・十四日)

二月会員集会の件 (二月十七日冬ののライド、8ミリ)

三十五年度役員改選の件

八ヶ岳スキー講習会は雪不足のため山田温泉に変更。

理事会 (三月二日)

マ六十年度理事改選の件

マ三月会員集会の件 (十六日山の気象について大井正一氏)

マ四月会員集会の件 (十七日懇親会)

マ五月会員集会予定 (ヨデルを聴く会)

山田温泉スキー講習会

支部としてスキー学校の催しは

今回が三回目ですが、教程指導法とも習う者にとっては極めて都合よく、段階的に整理されているのに驚きました。三日間といつても正味は二日間、しかも今回のように雪が少く、十分に滑る場所がないと、その間に各人の技倆を上達させ、教えたことをマスターさせるという事は不可能に近いことではあるが、今後各人が個々に行つた時に教わつたことを思い出しなが練習することが出来るよう、大体的要領を比較的に早いテンポで教えて頂くことは、習う者にとっては非常に有難い方法だと思ひます。このためには、各班員の水準が大体揃つていることが非常に大切なことになると思いますが、各階級の決定が原則として本人の申出によるものであつて、客観性に乏しいのではないでしようか。また各班単位で第一日の昼食を共にするとか、簡単な機会を作られたら如何かと思ひます。

(大橋祐一)

今年のヒマラヤ登山

今シーズンのヒマラヤ登山は相変らず活況を呈している。その概要をピックアップすると……

▼ダウラギリ第一峰(八七一メートル)、未踏峰では世界最高。

スイスのマックス・アイゼリンを隊長としたオーストリア、アメリカ、ポーランド、ドイツ人をふくむ十一名の国際登山隊が八回目の挑戦をする。トクチャの先のベイス・キャンプまで飛行機で装備、食糧を空輸する点注目されている。

▼エヴェレスト(八八四〇メートル)インド隊が、イギリス、スイス隊について第三登をくだして

いる。ヒマラヤ登山学校校長ギン・シン代将を隊長として隊員二十名、シエル五十五名、ポーター六百名という大がかりな登山隊は、その成果が期待される。隊員は全部印度陸軍軍人である。

▼アンナプルナ第二峰(七九三七メートル)未踏峰第三位。カトマンズの英国大使館付武官J・O・M・ロバーツ大佐が再びイギリス、インド、ネパール合同登山隊(十三名)を率いて向う。すでにトンジエにベイス・キャンプを置き三週間にわたる高度順化をはじめて

いる。

▼K2(八六一メートル)米国籍隊がイタリアについて第二登を計画している。隊長はマツキンレーやアコンカグアの登山で知られているオレゴン州のウィリアム・ハケット少佐。

▼デイスティガル(七八八五メ

ートル)これもカラコルムの未踏峰、オーストリア隊がねらう予定

▼ナンダ・デヴィ(七八一三米)ユーゴ山岳連盟スタネ・ゲルスネク隊長以下七名が向う。合せてトリスル(七一〇米)もねらう。

ユゴのヒマラヤ行ははじめて。

▼以上は五月から七月にかけての計画だが、このほか秋にはニュー

ジラランドのエドマンド・ヒラリを隊長に、シブトン、ピュー博

士らも参加した登山隊がマカル

(八四七〇メートル)に向う。九

月から一九六一年六月にわたる大規模なもので、酸素なしでのマカル登頂、あわせてエヴェレスト

地域の学術調査を行う予定。

▼これに加えて日本から三つの隊がネパール・ヒマラヤに、一つがアフガニスタンに遠征する。

ネパール組は三月十四日神戸から仲よく出発した。

(慶大)隊長山田二郎、隊員宮下秀樹、田辺寿、中沢公正、村田茂、高橋健、大森弘一郎、川田善郎、原田雅弘、木村勝久。

目標はヒマルチュリ(七八六四メートル)ムシ・コラの標高四千メートルにBCを設け西面からアタックする。アタックは五月下旬三回行う予定。シエル十二名、ポーター百四十名。四月八日ポカラ出発

(同志社大)隊長津田康祐隊員平林克敏、江上康、寺阪元雄、植西武司。カルカッタからタナクプル、ピトラガルを経て四月下旬アビの北側のBCからアビ(七一三二メートル)をねらう。サード

には一九五四年イタリア隊とこの

山に登つたというガルツェンが加わっている。シエル六三名。ポーター百名。

(東海連盟隊)隊長 伊藤久行、隊員岩瀬正次、二本節夫、石原国利、加藤幸彦、春日金徳、稻垣恒夫、羽田栄治。

ジュガール・ヒマル主峰ピク・ホワイト・ピーク(七〇八三メートル)に向う。四月八日シエル八八名、ポーター百二十名を伴いカトマンズを出発、一九五八年深田隊のルートをたどりジュガール・ヒマルからランタン・ヒマルまで足を伸ばす予定。

(京大隊)隊長 酒井弥二郎、隊員吉井良三、沢田秀穂、広瀬幸治、酒井敏明、岩坪五郎。

パミール高原の学術調査を主とし、あわせてアフガニスタンの最高峰ノシャック(七四九〇メートル)初登頂をねらう。六月上旬ベキスタンのカラチを出発、オクサス川上流のワハン溪谷を調査し十月下旬帰国予定。

マツキンレーへも

北米の最高峰、アラスカのマツキンレー(六一八七メートル)に早大、明大の二つの登山隊が登頂する。

(早大隊)隊長 吉阪隆正、隊員今村俊輔、鬼頭万太郎、寺谷昌恭、菊島芳彦、山本晃。

(明大隊)隊長 交野武一、隊員高橋進、藤田佳宏、三室喜義、東真人、小林孝次、金沢恒雄、鍛冶晃三、土肥正毅。

明大の計画は渡辺操教授を団長とするアラスカ学術調査団の山岳班として行うもので、本隊は四月